

R 40.25

1 of 5

* TESSAKU, Tessaku Sha, Vol. 1, 1944

67/14
C

鐵
柵

創刊号

松原 彦雄



鉄柵創刊号

目次

發刊の辭	加川文一	一
キヤンプ雜觀	山城正雄	二
裸の言葉	伊藤藤正	九
詩「君が像を彫れり」	樋井良二	二
隨想「偉さと云ふこと」	外川明	三
短歌「謫居雜詠」	矢尾嘉夫	五
詩二篇「勝安房の惱み」	野澤襄二	一六
綴方教室		
吉屋信子作「花物語」	市場美恵	一九
アミエ作「クオレ」	大城眞砂子	二〇
山本有作「唐人お言」	西川博	二一
詩二篇「鉄柵」	加川文一	二三
短歌鑑賞並に批評	治良彦	二六
俳句	中口飛朗子	三四
	保田山崎風	三四
創作欄		
時代	樋井良二	三五
蕎麥	水戸川光雄	四七
智識人の責任	丸山定夫	五〇
下駄	咲山春枝	五八
編輯後記		

發刊の辭

文明は私たちの所有物であり、文化は私たち自身であるといはれてゐるが、よくそこに兩者の特質を窺ふことができると思ふ。この見方によればアメリカに生活してきた日本人の文化は勿論ありのまゝの私たちが親しく是を物語つてゐるといへる。そして私たちの文藝はこの自分達の文化の一形態として存在してゐる。今移民地に最後の花を咲かせてゐるとも見られるであらう。

このときに當り、山城・野澤・河合の三君の力によつて新しく文藝綜合雜誌が発行されたのであるが、多くの煩雜な業務が伴ふことの判りきつた此の種の仕事が計畫され実行されるに至つたに就ては、それだけの理由が存したからである。その主たるものとして私たちは現在自由を奪はれた收容所生活をしてゐるとは云へ、自分たちの文化―すなはち自分を決して失つてゐるものでないといふことを實際に於て示すに適した試練をうけてゐる点を擧げることが出来る。次には私たちが未だるべき戦後の新生活に踏みいるに際して整へてゐなく、それはなうぬ用意の具體的な證しを自分の力で燃やしつつけてゐなければならぬ点である。どちらが適當な發表機關を得てよき實を結ぶことができる。

私たちは三君の意のあるところを掬んで、よき作品とよき理解によつて本誌を支持し、またそれによつて現在の自分たちの生活をも温めてゆきたいと思ふ。

(加川 文一)

キヤンプ 雑感

山城 正雄

サンタ・アニタで友人が標札を彫つてくれた。幅三寸長さ一尺余りの薄い板にドイツ式の華文字であつた。その上をインデアシンクで黒く塗つてくれたので、文字が一層浮き立ち、大変良いと感じた。グラナダではそれを内側の戸にぶら下げたが、それも僅かの間で、當地に来る時には取り外して道具と一緒に持つて来た。それが何處に行つたか分らない。突出し式の窓に、その支へとして友が無断に使つた事がある。窓の下に落ちてゐたので氣が付いた。跳ね返つた軒下の泥が標札の表面を点々と汚してゐた。拾ひ乍ら、この標札に何とない新しい愛着を感じたが、それから又何處に置いたか分らない。誰かがストージに投入したか未知れない。かう思つた事もある。窓の下に落ちてはゐないかと、頭を突出して覗いたが、枯れ草の根元に紙切れが引つかゝり、風に戦慄してゐた。其處には標札はなかつた。キヤンプを歩いてゐると色々の標札が目につく。日本人の平凡な姓名を珍しいとは思はない。たゞ、標札が墨で書かれたり、浮彫にされたり、色彩で流されたり、横に走つたり、線に変化があつたり、愛嬌があるのを面白いと思ふ。中には風晒しにするには惜しいと思ふ草書があり、山川が背景に彫られたものもある。骨董品が燦

格を失つて年末を待つてゐるのもあれば、漫画が嫁を欲しといふ恰好の物もある。又人型・俳人型・坊主型・実業家型・國策型・考へて見るとこの標札もキヤンプの文化を表現してゐるやうだ。

與へられた家を「我が家」と意識し、意識されて、最初は訪問客と郵便物の爲に、標札も姿を見せたのであらう。それが「書く」かう「彫る」になり、新しい方面に展開したのであらう。板の節を拾つて来ては、好きな女性の名前を彫つたり、小さな下駄とつて悪人の胸にぶう下つたり、桃の種を載つては指輪を創り出したのであらう。退屈だったし、時間もあったし、面白かったし、かうしてキヤンプの文化は最初の萌芽を生じたかも知れぬ。

標札の原始時代から、より統一された彫刻の黄金時代が来た。大抵の人が彫り出した。面白んだらう。皆熱心に、眞面目にこつ／＼と彫つてゐた。出品したと云ふので、いざ、見に行くと、素人はやはり素人だ。暇潰しはやはり暇潰しだと思つた。これと云ふものが見當らない。良いと思つたものでも、線には俗世的な不齊があり、圖みにも餘情が流れてゐない。遠景とか、中景とか、近景とかははつきりしてはゐるが、その調和に白々しい處が多い。詩人が求めてゐる象徴的な陰影の存在はほとんどない。最後に塗つた假漆が情の散文を與へたやうな氣がした。

一度友人の家に行つたことがある。親子馬がやつたりと水を飲んでゐる彫刻が壁に懸つてゐた。素人の作品だなあと思ひ乍ら見てゐると、「彫刻の先生が彫つた

んだ。佳いだらう」と来た。「佳いが、馬は水を飲む時には、尻尾をあんまり真直に立てないと思ふがね。」と答へたら「けちを附けるな」と来た。悲しい事には彼には圓山應舉の猪を知らないらしい。自然と藝術とは双生児である筈だ。理論を超越した自稱國粹黨の「けちを附けるな」では仕方がない。話題を冗談に誤魔化して帰つて来た。

X X X X X X X X X X

假收容所からグラナダに来て、部屋にクロゼットの用意がされてゐたのを新奇とは思はなかつた。それが友人や知人の家に行くと、別に意識したり、注意したりして見るのではないが、このクロゼットの戸が目につく。布をぶら下げたのがある。花模様のものもあれば、ばつとした圖案のがあり、紅のカーテンがあり、女の着物ドレスが商賣替へしたやうなのがある。板で造つたのがある。ハンマの痕アスを残したのがあれば釘の頭が巧く隠れたのがある。假漆で塗られ、光澤が新鮮な印象を與へるものもある。粹ソフをつけたのがある。すべて常識的だ。クロゼットも着物を入れる為には必要だらう。それを上下に切つて、上には靴と箱を、下には着物を入れるのも常識だらう。だが、クロゼットの戸は銘々で造つたのである。埃が入らないように、体裁が良いうに、はては美しいようにと考へ、意識が実行に移つたのであらう。アイデアが異チガふ。技功がある。変化があり、美があり、何でもない平凡さの中に文化が微かに呼吸してゐる。

クロゼットの一部分を盗んで、酒を入れる棚を造つてゐるのを見た事がある。巧いと思つた。どうして酒を手に入れるか、假令入れたにしろ、十六弗の月給では心細からう、とも思つたが、棚から出して飲まされたのは確かに酒だつた。それを口にしろ、アイデアの方が巧いと思つた。

僕はこのクロゼットの位置が嫌であつた。出口とストレーダの中間に坐つてゐるのが氣に入らない。だから叩き毀して寢室に向けて造り変へた。結果はどうであつたにしろ、部屋うしくなつたこと、廣くなつたぐけでも良いと思つた。訪ねて来る友人は皆「良いね」と言つてくれた。僕も又良いと思つた。クロゼットの位置に対しての創意的な返迎に……。

ツルレーキに来て見ると、あると思つた筈のクロゼットがない。仕方がないので造ることにした。「かうしよう、かうしよう」皆が言ふ。皆の考へが異な^{ちが}ふ。別に美觀と云ふ背景があつて言ふのではない。ハート山から来た人は、ハート山で見たクロゼットを主張し、アーカンソーから来た人は、ローワのクロゼットを懐古的に物語る。下年間のキャンブの文化生活も恐ろしいものだ。宿つてしまつた先入觀念が一人前の文化を主張する馬鹿々々しさも、馬鹿には出来ないと思つた。だが戸にする板がない。理性のやうに走つてゐるフエンスの冷たさの外に、板の山が見える。仕方がないので寢台^{ベッド}掛布をぶら下げることにした。「情緒があつて良いね」友が云ふ。白地に水色の暮盤型^{モダン}も粋で良いが、「此處はクロゼットがある」と云ふ^{こゝ}が強すぎる。四

つかのキヤンプを旅した靴が、貧乏巾帯を見せて、クロゼットから覗いてゐても、今では別に直さうとはしない。クロゼットまでが巾帯穿れをしてデカダンスになつてゐる。

X X X X X X

寢室と客間を二つに區別する事は良いことだ。他人が来て寢台に腰掛け、妙な体温を残すのも嫌だし、汚れたシャツを見られるのも嫌だ。蒲團が落ちないように、寢台の足の方を縄で縛つてゐるのも変だし、無い秘密までも見られてまつまうない。自分もだうしないが、遊ぶに来る人の中には最つとだうしないのがある。其處で文面をして登場したのがパティションである。皆特長があり、情味を持つてゐる。すばらしい屏風もある。惜しいことには、キヤンプの紫式部は屏風の外側で編物の他何も知らない。衝立は女性的で華奢だ。袴と細工と布が多い。酒があれば、酔漢は最初にこれを掴むだらう。壁になつたパティションには絵や字眞が飾られ、粗製の彫刻が先輩面にぶら下がつてゐる。壁に淡白な水墨は良い。人物画は坊主の他すべて底俗だ。

戯れで出来た子が、やはり自分の子である如く、かりその生活の産んだ文化は、やはり民族の文化だ。友人の家に遊びに行くと、あの狭い部屋で群雄が割居して、自分の縄張りを争つてゐるのが多い。寢台が城で、パティションが境界である。その真中に、川中島のストীগが愛情のやうに立つてゐる。銘々で買ったんだらう。窓のカーテンの色や圖案が全部異ふ。無いものもある。獨身者の部屋は個性が強すぎ

ていけない。文化は継子扱ひにされる。やはり女性が必要なんだ。文化はよくとも、人間らしく生きるには、結婚をしなければいけないらしい。

布哇^{ボン}生れが遊ばに来いと言ふ。遊ばに行つても十年一日の軍議があるだけだ。首輪の紙を引き延ばして、電燈の周圍にぶら下げてる。これを見ては布哇を想ひ出すのだらう。僕には綺麗とは思へない。椰子の枯葉がだらりと垂れてゐるやうだ。

窓に貼つてゐるものもある。カーテンの代りでもないし、庇の爲でもない。やはり裝飾であらう。カナカワの豊満な腰を巻いてゐる踊着のやうだ。ユクレレの持つ乾枯^{ヒカラ}びれた哀調はあつても、他國の空では常夏の情緒はさう骸になつてゐる。氣候の所爲だらう。

グラナダでは鴨居のあるバテーションを造つた。良かつたか、悪かつたか知らない。其處に「永遠の今」と書かれた額を懸けてゐた。日米戦争と同時に、友は八方に散つてしまつた。僕には、永遠の今の持つ意味が懐かしい。當地に来る時もこの「永遠の今」を持つて来た。友情は變つてしまふかも知れない。併し、軍服の友よ、死なないでくれ。

X X X X X X

ツルレーキの陰氣な気分は、彼の黒い壁の中から生れて来る。それよりも陰氣なのは戸口に加造されたボーテだ。構造が立体であるだけに、下手に建てられたものは、正比例に感じがよくない。「玄関」とか「門」とか云ふよりは「小屋」の感事

が強い。雨や雪が降る。風や埃が吹く。それを選ける爲に造つたらしい。その小屋の中に石炭を入れる。板切を集める。バケツや箆を置く。猫が其處で悪戯をする。猫はキャンブ中に殖えて犬と喧嘩をする。このポーチの壁が白壁であつたり、板壁や硝子壁であつたり、蒲鉾であつたりする。苦心の跡はあるが、惜しい事には美感が無い。

切妻式キリヅムシキの建物の壁に、もう一つの小さい切妻式の小屋が突き出てる。それに柱があり、壁が食ひ付いてる。最も簡単なのがこれだ。屋根の下にもう一つの屋根があり、兩側に凸ツボの形になつたのがある。兩方が物置になり、真中が入口で、此處から板切れの飛石が便所まで續いてる。屋根の下にもう一つの屋根が箱の恰好をして延長してあるのがある。俗に云ふ母屋造りだ。やはり石炭があり、焚きつけの板切れがあり、「陰氣」が別荘を樂しんでる。屋根と二本の柱だけが立ってあるのがある。壁が風に吹き飛ばされた天地根元造りのやうだ。あつさりして良い。諸葛孔明はこんな處に住む。空も見えろし、空の彼方の雲も美しい。

夜歩いてみると、このポーチの燈火テカリは良いと思ふ。情緒があるだけに寂しい氣もする。細工で造られた壁に、うどん屋を屏業したやうなのがある。巷間の燈火を見乍ら、三味線の餘韻を聞く事を思ふと、腹の空つたやうな本能の淋しさを覚えるのである。夜の隔離所は神経がないやうに睡つてゐる。

裸の言葉

一ヒラの思ひ出

伊藤 正

皆、野球見物にでも出かけたのか、夕食後のひと時を、浴室は珍しくひつそりとしてゐた。先刻から私は便所のいちばん奥まったところに陣取つて、その反古箱の中かう日本語の古新聞をつまみ出しまゝ、不断はめつたに読まうともしないやうな記事にまで、いちいち目を通してゐた。

すると突然、乱れた下駄の音がして、誰かはいつて来たらしい。浴室の方からは見えないやうにしきりがしてあるので、向ふの様子も判然りしないが、どうやう二人のやうだ。着物を脱ぐ氣配を感じながら、私はえへんと咳拂ひをひとつした。ここにも居るぞ——と云ふ合圖なんだが、こんなところに誰かゐることを相手に感知させようとするこの心理は、うっかり覗くまよ——と云ふ防禦線を無意識の内に敷かうとする、氣の弱い神経質を努力なんだと思つて、ひそかに苦笑した。

やがて、浴室のかたいセメントの床の上に、勢ひよくほとばしる夕立のやうな水音にまぎつて、明るい子供の声が話しかけてゐた。

「おぢさん、二十と二十さんばうか、ミイ知つてるよ、いくつだい」

と、大人の太い声が、ぞんざいに続いてゐた。

「四十！」

「うむ、四十か。あんたはなかなか賢い子だなあ。それあいつたい誰に教つたんだい。」

「学校の先生に。」

「この頃、学校は休みなんだろう。」

「ミイ、サンマースクールに行つてゐるの。」

「さうかい。それ面白いな。」

話声はそれつきり杜絶えた。しばらくして、大人が出て行くらしい荒い下駄の音がした。ボタン！と強くたたれたドアの向ふに、瞬間、下駄の音は消えて終つた。後にはシヤ、ア、シヤ、アとほとほとしる水の音だけが、時雨のやうにきこえてゐた。

私は思はず微笑んでゐた。何と云ふ無心な言葉だろう！。二十と二十なんぼうかミイ知つてゐるよ。——なんぞ、あれは生れる時に母親の胎内からそのまゝやつくり持つて来た。生のままの言葉ぢやないか。大人の誰に、あんな素直な、のび伸びとした自由な言葉が吐けるだろう。あれは神の如く無心にして、青空の光のやうに絶真で明るい。子供のみの持つ裸の言葉ぢやないか、と思つた。

やがて、浴室がさとの静寂にかへつた。そして、つい今まできこえてゐた浴室の床に注ぐ水音だけが、雑木林の空を過ぎて行くしめやかな時雨の音のやうに、私の鼓腹のずつとおくぞこで微かに消え残つてゐた。

用をすませた私は、入口にぬぎすてある小さな下駄に目を落しながら、そつと浴室を覗いて見た。乳々とよく太った子供が、白い大きなタオルを持てあますやうにして、かうだをふいてゐた。それはついこの間、他処のブラスから自分たちの方へ引越して来たばかりの、まだ名前も知らぬ人の子供だった。

「あんだの名前、伺ていふの。」

「ススム。」

「ススムさん——いい名まえだね、いくつ。」

「六つ。」

「さう、——ナイスボーイだね。」

ススムさんのよく太った腹は、臍の穴が細くくぼんでゐた。そして可愛いチンコロが、まともに私の方へ覗いてゐた。青い葉かげの微風にゆれてゐる、生れたてのトンガラシのやうに——。

窓のガラスに射しこむ夕陽の光が、浴室の白い壁いちめんを躍つてゐた。そして、はち切れるばかりに明るいその空氣の中で、静かに微笑んでゐる子供の裸の姿に、恍惚として、私はしばし見とれてゐた。

露出された子供の無心な肉体から受ける清く明るい感じは、子供のみに許された裸の言葉から受ける素直な微笑ましい感じとそっくりだ。それは大人の手のとどかない、遙かに遠い世界に屬するものだ、と私は思った。

君が像を彫れり

樋江井良二

吾更け行く冷き部屋に坐して

君が像を彫らんと一挺の鑿を握れり

拙き彫塑は

搜せど君が面影見せず

吾一人憔悴く

光れる鑿熱き己が手の戦きも

君が面影を深く探りて

やはらかき心情に貫かんとはす

周囲はあまりにも静謐に更け

吾

ひとり

君が白きクレイの像に向ふ己が心の

あまりにも見窄うしきを悲しめり

隨 想

偉さと云ふこと

外川 明

吉田絃二郎先生が或感想集の中で、何かの教授中、そんなことでは偉くなれないぞ！と云つたら、或生徒から「先生！偉いと云ふことはどう云ふ事です？」と問はれてその解答に困つたことがある。と迷懷してゐたことを記憶してゐる。私は、かうした異つた時代に、異つた輕任地生活をしながら特に人間の眞の偉さと云ふことに就いて考へさせられるのである。キャンプ内にも隨分偉さうな人間が澤山居る。そしてその偉さうな人間が、自他共にさう思つてゐる人々が、果して眞に偉い人間であるだらうか？否々と片端から否定することゝ不遜な態度であるが、さうかと云つてそのまま一切を肯定する氣にもなれないのである。

たゞ小さな私達在日本人間に於てのみでなく、全世界の古今何れの時代の人物でもよく觀察する時、眞に偉いと思ふ人間は實に少いものであると同時に、平凡とのみ觀られてゐる私達の周圍に、思ひがけない偉い人間、尊敬に値する人間が隠れてゐることゝ少くないのである。

その人々によつて人間の偉さの觀方も異り、そして各自が異つた角度からその偉さへ向つて進まうとしこゝるるけれど、私達藝術を愛する人間の觀方は普通人のそれ

とは随分異つてゐるやうな氣がする。然し、靜かに、深く／＼掘り下げて考へる時、人間の眞の偉さは、決して、この偉と云ふ字の如くたゞ大きいことのみではないと思ふ。

名もなき路傍の一石一草にも、それ等の偉さを見出し、それ等のものの生命にふれる時、私達の偉さと云ふことには標準が定まるのではないだらうか？

生れながら異つた體力と異つた頭腦とを持ち、そして異つた環境の下に生きてゆく私達は、皆同じやうな大きさに偉くなることは出来まいけれど、眞の偉さを掴み、それを身につけて、小さきは小さきなりに偉くなることは不可能ではない。人生とは、自己の偉さを探し求める可く努力して行く一つの道程を云ふのではないだらうか？

吉田絃二郎先生が困られたと云ふその質問の解答が、僅か一頁や二頁の紙上で出来る筈もないが、そして私は無理にもそれに答へ、説明しやうと思はないが、「人間の眞の偉さ」と云ふ質問こそ、私達が一生涯を堵して答へるべき大きな宿題であると思ふ。

藝術同好の友々よ！ 藝術もまた自己の偉さを磨くべき一つの砥石であると思つて、不断的努力で觀、讀み、書き、創り、そして反省しつゝ進んでゆかうではないか。

短歌

謫居雜詠

矢尾 嘉夫

過ぎし日の雪まだ消えず踏み入りし、

おどろが中に清くこそあれ。

職もとめ出づる報せは讀み了へて、

心たのめなき思ひにをるも。

小説を讀みてをりしがその中の、

ある表情にしばし拘はる。

靈柩車は遠くなりつゝ枯立を、

越えゆく際きめはふと光りたり。

國こざる聲にこたへておもむかむ、

命まさびし燃えつついまを。



詩 二 勝安房の腦み
篇

！ N氏に寄せて！

野澤 裏二

庭に咲いた梅が

半月の孤影をひき

ひらひらと風に散つてゆく

春まだ浅き江戸の二月は寒い。

徳川三百年の浮沈を脊肩に擔ふ

江戸總攻撃を目前に控えて熟慮する

安房の心は暗かった。

妥協することが、謝罪することが何が悪いのだ。

三百年の歴史を持つ主家を、江戸を、人民を、

焦土より救ふ道は妥協より他にないのだ。

戦ふことのみが武士ではない。

死することのみが忠ではない。

死は鴻毛より軽く、義は泰山より重し。

君を安きに置いてこそ徳川の恩顧に報る

臣の臣たる道ではないか

理性のない感情に帆をかけた死がなんになる。

信念に立脚しない抗論が忠義か

果して徳川の興亡を救ふ事になるのか。

半月は雲間に沈み、夜の街と謳はれた
大江戸はしんしんとして更けて行く。

肌寒い庭先に佇みながら

黙々と瞑想する安房。

すべて時の流れだ。時勢は人力に依つて左右

さるべきでない。ましてやいま

いたづらに國內で鬭争に日をおくつてゐる時では
ないのだ。

各國の文明文化は日を追つて進み、利權の

擴張を漁りつつ機會の到来を窺つてゐる

ではないか。もとより私とても

たはれ行く主家を維持できないことは辛い、

武士として人情として忍び得ないことだ。

されどえとても國の爲だ。愛する國家の

行く末を案じる故にだ。

されば

僚友よ

愛する江戸の人々よ

憎んでくれ、恨んでくれ、嘲笑つてくれこの勝を！

早春の深夜、黒空に盛衰を物語る江戸城を望みつ、

悲歎に涙する安房の上に

ひらひらと梅の花が散つてゆく。

わからない魅力

平凡な風景にあき／＼したぼくの心は
新鮮な魅力を求めてゐる。

魅力はどこにでもあるだろう。
街かどにも――

バラックのなかにも――

また、女性の腫の奥にも――

だがぼくの求めてゐる魅力は

そんなものではないんだ。

とつと／＼ちがった魅力なんだ。

その魅力とは

自分でもわからない魅力かもしれない。

どこに存在してゐるのか――

深い山の中にあるのか

海の彼方にあるのか

あるひはこのキャンブの中にあるのか。

そのわからない魅力を

ぼくのところは一心に求めてゐるのだ。





註

「ルレーキ」に在る地三井の若人は勉強しとる。実語を勉強し。日本語学校へ行き、佛の新設され図書館へ通つて日本語の小説を讀んでる。私達はこれらの若人と對して無関心でありたくない。援助してやりたい。日本を實際に知らないこれらの人達が日本語の小説を讀み、何を感じ、何を得るか、觀察することあり。私達は彼等から、私達の氣持、かなしい、いろいろなものを教へることを要す。

吉屋信子

花物語

市場 美志恵

私が涙を持って讀んだ「花物語」は吉屋信子先生の十八才の時の名著だと聞く。
私はふだん *sad ending* の物語とか小説を讀むのを餘り好まない *sad ending* といふ中に或る美しさを感じながらも主人公が死ななかつたらよかった、お金持であつたらよかったと、後には何か感情の力スが残るのが常であるけれども、色々な花によせて書かれてある「花物語」の一つ一つの物語には一つだけ *happy ending* は無かつたけれども、不思議とそうした心持は残らなかつた。唯何とも云へない悲しさが残つた。仕事に行つても要に氣がしずんでは方が無かつた。吉屋信子先生の美しい詩のような文にすっかりみせられたのか、それとも春夏秋冬の四季に咲く花の、氣高く美しく、又可憐に、或は散り、或は包む、そうした花にたとへて、はかなく散つて行つた友情、友の爲に犠牲になつた優しい心立の少女、親友にうらぎられて悲しみに打ちこぼれた少女、親友に死なれた少女と可哀想な主人公に同情したのか、それな。何時も雑誌の廣告で見る度に讀みたい、と思つてゐる此の「花物語」を讀む事が出来て非常に嬉しかった。

クオレとはイタリア語で「愛情」といふ事である。

はじめは何かクオレと云ふ題がどういふ意味なのかはつきりしなくて、いやだつたが讀むにつれてクオレと言ふものゝ眞値をしみぐと味ふ事の出来たのを嬉しく思つた。主人主エリニコの書いた十月から二月の五月間に亘る日記帳に現はれて来る豊富な父の愛、母の愛、先生の愛、又は友情等が、それ／＼異つた対照の下に、その細やかな愛情を表示し、私は人生に何かの暗示を與へられた様な感に打たれた。

とりわけ私は小学生同志の間に於ける羨望、ねたみ、競走心とあらゆる学校時代のその日／＼を何のつゝみかくしもなく書かれてゐる点が好きだつた。それは私自身も小学生時代に味つた事のある、或は見たり聞いたりした事のある、いくつかの出来事に類似し、それを記憶に新しくするに充分であつたからだ。

作者のエリニコを通じて全イタリアの小國民に、少年少女に、日本で云ふ大和魂、イタリアのイタリヤ魂といふものを總ての日常生活の中に愛情を通じて見出させ、心の奥深く植え付け様としてゐる点、特に月次講話の「ロンバルダヤの少年斥候」パジオアの少年愛國者等日本人の愛國心と共通するものを感じた。

最後に私はこんな事を考へた。日記帳と云ふものが書き様一つで如何に興味あるものになるかと……毎日同じ日が續く様に思はれる人生を、絶えず心の窓を開き、心の目を見開いてゐたならつと／＼、と云ふればいやになる人生に何かの變化を、興味を見出す事が出来はしないだらうか、と……私達は絶えず心の目を敏感に働かしたいものである。

山本有三

唐人お吉

西川 博

お吉は実に可哀想な女であつた。米國に徳川三百年の鎖國の夢を破られ、開國して、動亂した當時の日本の尊い犠牲者となり、餘りにも偉くその一生を終つた彼女の運命——美人薄命とも云ふか、僕は讀み終つてお吉の哀話に同情の念押へ難きを覚え、又一種の悲哀はお吉を想像する僕の全身にかゝむ。米國初代駐日公使ハリ・ス・お吉と未來を誓つた船大工の鶴松や後に内務省の高官となつた齋藤原之助等が日本の大轉換期を背景として登場するお吉と其のお吉の悲しい運命を操つて行くのである。

ああー女なるが故に弱し、女なるが故に自分の生活を支配されつゝ、彼等の爲に悲しい一生を續けたお吉よ——無無念であつたらう。男を恨み、世の冷たさを恨んだ事であらう。

唐人お吉、唐人お吉と世間から輕蔑され、運命のどんぞりに絶えず悶えながら夢なく散つた下田港の藝者お吉よ、下田港は灯のつく頃は星を見つめては又藝者屋から聞える三味線の音を聞いては、過ぎ去つた樂しかりし日を思ひおこして幾度も一人さびしく悲しい運命に袖をぬらしたことであつたらう。

感情にからまれて、描き出された唐人お吉の哀話はや晩くまでかゝつて讀み終つた僕を何時までもねむらせなかつた。

詩二篇

鉄柵

ちろちろの小さき國ほろむ
國の柱かなたまたこなたに
燃え落つるただなかにあり
われう大いなる戦ひの日
そのあうしより受けとりし
火の粉まじれるかなしみを
地に生くるもののきびしさも
己れの血とし
己れの肉となさん

風ふく日も

灰のごとき埃りうづまく日も
寒ざむととがれる

加川 文一

かの鐵柵はあれど

そは汝の道のただにひとつなるを

示すのみ

内にちからをたくはへ

かりそめならざる其のちからを

苦難の日の己れとはせよ

柵を出づる日は

たじろかざる汝のうちにあり

その日きたるまで

空虚なることばを吐きて

また己れを吐きすつることなかれ

戦ひは大いにしてかぎりなければ

かぎりなきたたかひのうちに

汝の敵を見失ふことなかれ

汝をも失ふことなかれ

砂塵

— マンザナ風物帖より —

風烈しく吹きすさびて
濛々と立ちあがる砂塵は
高原の收容所を掴み
日々に渦まけり

あはれ天日を暗くする
砂塵のあうしよ



いづこにも人の姿あらうず
自然のたいなる喘ぎの底に
箱のごとくならびたるブラックは
低く地に伏して軋れり

われりここに收容れられしより
いく月ぞ
をみなごの肌もざうざうとなり
灰色に狂ふあらしの日
はてしなくつづけば
砂はかなしき夢にもまじれり



短歌鑑賞並に批評

泊良彦

●山頂の朝日めぐまし病床に

須叟の光り聖き思ひす

●病室の夜の静寂にほの匂ふ

瓶の花束暗に白くして

この二首は他の女一首と共に高原短歌會詠草として梅本静恵氏のトマウンテンが最近発表されたもので、私はこの発表詠草後記に……技巧の至らないところはあ
るがこの稚拙な底に透徹した心と眞実が一つになつて光りを發してゐる。これらの
作を夫の勅選集時代技巧の末に随したるの下つては明治の明星時代に於ける浮華な
ものに比べて見たる今の現実的短歌の深さ尊さが誰にも一目解るであらう云々と述
べてゐる。梅本さんは未見の方であるが一年程前より私がその作品を見て上げてを
る。最初より深みのあるものがちつてゐるがこれは私は私をしてほうと思はず聲
を擧げしめた。氏は不幸最近病弱で再三入院される由があり右の歌もその入院中の
吟詠だと思はれる。病氣は人を眞實にしその心を沈潜せしめる。浮々した心より奔
れた歌は出来ない。前線のわが將兵も多くの光輝ある短歌を詠してゐるが生死の境
に出入してその心飽くまでに清純眞剣なるが故であらう。右の歌別に釋する要とあ
るまい、或朝病床に眼を醒ましてゐると高原の山頂に朝日が出でその旭光が病床に

射してきたのである。普通の時健康な者には太陽の光を何とも感じなくなつて来るが病者の心理それも戦時不遇の收容所内の病院に於て呻吟せる時であり苦悶の夜を明かした時に接した旭光だといふことを思はないとこの四五句は味到することもないであらう。聖き思ひすといったのも須叟の光を受けて一層寂々した感味が生ずるのである。旭光が病床に差す間は本當に須叟であつたかも知れないがこの須叟の光といふ言葉はその字生的意味を超越した象徴味をも感ぜしめる。第二句のめぐましは作者としては恵ましの心であらうがこの主觀語は一首の効果かういつてなほ同題視されるものである。次の歌は更によく理解される歌である。四五句は印象的である。病苦の爲眠り難い夜半の作と思はれる。病室の暗に白き花束が浮いて見えほのかな匂を静寂の中に發するといふだけであるが、この暗に白くしつといふ結句はしつかりして来る。後記に於て私は更にいつておく、時代は健康な逞ましい歌を要求するだが若し病によつて眞實に徹し得ればそれこそ有難い事である。

●かつがつも命生きつぎ抗争のつひの極みは正眼にみなむ

この歌は元シアトルで華陽会を率ひ、昨年はミネドカにありし田中尊城氏の近詠である。かつがつは緩かなことはいふかうかつがつも命生きつぎの上二句はどうかかうか命を死なず生きついでといふ意味にとつてよかう、氏には二回面會したがまだ老齡者でもない氏より餘り頑健な身体でないさうだから或はそんなところからかういったものか、または非常に長期戦と覚悟してのことだらう。尤も詞

書はないがこの抗爭を現大戰と解しての上でいつの事である。四句は終極、正眼はまのあたり、二句を受けて解するやう生きたこの眼でまのあたり大戰の終局を見たいとの意、なむは願望の意を持つ助動詞で「見む」といふよりは強いのである。この歌言語の堅使もうまく格調も大きく氏の特徴を持った作品と思ふ。

●國と國戦ふゆゑにをみな吾も 軍服をつけて畑に働く

ミネドカなる神部孝子氏の歌で意味は明瞭である。餘事であるが私は移住の途中彼地に立寄り實際にその軍服姿を見たことである。その婦人としての氣概が一首を貫くのみで何の技巧もない素朴なものでありそこによさもあり一面物足りなさもあるのであらう。二句のゆゑにのあたりは尚一考の餘地があらう。

●幼兒は吾の歸りを待ちあぐみ 夕べ出て待つ道に會ひたり

ボストンの長瀬勇君の近詠である。これの意味明瞭である。さして特徴のある歌ではないが、いささかの難もなく行届いたものご年功を思はしめる。夕べ出て待つ道にあひたりは何げない言ひ方であるが幼い愛兒がその父を待ちたるさま、父子の姿、言葉まづが見え且つ聞かれる思ひがする。單純な言葉の、人によつては無感動なといひそうな裏に見逃すことの出来ない餘情がある。

●濯ぎもの吾となし了へうら清し 病みに病みにし年の終りに

この歌に於て注目すべきは二句の吾と及び四五句であらう。この四五句の如く作者は永く病床にあつたのである。無論洗濯なども出来よう筈となく家人によつてな

され或は外に出したのであらう。それを今作者は書と自うなしたへたのでせうばりしたし自分のことを自うなした快い氣持になつたであらう。「うら清し」の中はあゝもう自分を洗濯が出来るやうになつたといふ歡喜の心をもつてゐるのである。それが永いこと病氣してた揚句の「年の終りに」で新年が目前に迫つてゐる時であるしこの結句は一首に重大な効果をもつものだ。私は一首の中に同じ語を成るべく重用せぬやうに注意してゐるのであるがこの四句の如き場合には、病みつづけしなどいはうより病みに病みしと同語重用の方がいかにも病氣のみ永くしてたことになり語調の上からも効果的なのである。よく病後の作者の心持の現はれた一首といふべきである。右ミネドカの中村郁子氏の作である。

●日の昏に服みし藥のほろ苦き わが息をかぐむとり夜床に

これも病者の作であるが別人である。藥は食前か食後か又朝夕と時を定めて服用するが常であるし、日の昏れにの初句は結句の夜床に、とよく照應する。ほろ苦きは味覺、息を嗅ぐは嗅覺であるが作者はさつき服用したときそのほろ苦さがまだ口に残つてゐるやうに感じてゐるのは他人でも推知されるところで、ほろ苦き息を嗅ぐといつても不合理ではない。どころではなくこの「ほろ苦き」は實感といふ以外に一首全体に対してよくきいた言葉である。歌は「言葉の藝術」といはれてゐる意味合ひの上のみでなくよくひびきよく照應することが大切であり、きく、きかぬのあることを思はねばならぬ。作者は病が苦しいとささびしいと言つてはないが

そのわびしい心持は一首ににじみわたつて来る。前掲のものといひ、これといひ言葉にすこしのそつとなく技巧がすぐれて来る。偶然に今回詠草には緑茶の歌にも「ほろ苦き」があるがやはりこのほろ苦きの方がびつたりときいてゐる。これは糸

井野菊氏作。

●編み疲れふと手を休めし瞬間に 時計の音を大きく意識す (ハイトマンテン 加藤はるゑ氏)

作者は一心に編物をしてゐるたが編み疲れてしまつて手を休めた、ところが今まで編物に凝つてゐた間は氣附かなかつた時計の音が手を休めた瞬間に大きくきこえたといふのであるが普通では歌に漢語を使用すると、その一節だけが耳立つて生硬感を伴ふのであるけれどもこの結句の意識すなどは聞ゆるなどといふよりも効果的だと思ふ。ふとは必然性が少いやうだ。

●もどかしく包紙解きてゐる子うの 弾める息が吾にかなしき (トバズ 川崎富子氏)

この作者とは昨年一度会つたことがあるが、まだ二十を出たといふばかりの娘さんである。作者の年頃を知らないといふと歌の本當の鑑賞の出来難い場合もあるのだが、この歌としても年頃がわかつてゐる方がこの四五句の理解に便利だと思ふ。一句の「もどかしく」と四句の「弾める息」とがよくたすけあひ照應して効いて来る。年頃ブレセントを貰つた時でであらう。その子のさまも彷彿とするではないか。さつき作者の年輩についていったが、今やつと少女時代をぬけ出るといつたう若い作者であり、はづめる息がわれにかなしき」といふ心持が一層によく理解されるのだと思ふ。

ふ。即ち四五句は作者が今し方通りすぎた時代に対する追憶でありまた羨望である
と見られる。

● 歳の暮とはいへどキヤンプは静かなり、吾は呆けつゝ歌詠みてをり

ハートマンテン

(比美美千代氏)

戦争前のありし世の歳末を はたまた、棚外の華かな街頭を想ひ見乍らの作者の
独り言がこの上三句となつてなる不言の声である。この一首で最もよき言葉はその
四句であらう。「呆け」は老毛と解することもあるが、ここではぼんやりといふ意
にでも解しようか。無論上三句をうけて即ち筆やかなそ外や過去を忘れたかの如く
呆けてといふのであり作者の諦念の声でもある。作者は私と隣接の町に南加では
住んでゐたことだに一つに一度も面接の機会がなかつたのであるがもう永年病床に
ある婦人でありさういふことを知ると一層鑑賞がゆきとづくであらう。

● 拘引の騒ぎに明けしこの朝 ^{あした} 大霜降りて物の静けさ (森 すみ子氏)

この作者は推察も出来るがツールレイキ人である。この一首には人事と自然と
の対照、動後の静がよくまとめられてしんとした感動を他に及ぼす力がある。いつ
でもたやすく出来るものではない。原作ではオニ句が騒ぎはとなつてゐたがそ
れでとほらぬことはないがにのうが適切だと思ふ。なほ四句、大霜はその時の季を
現はしてゐる。嚴冬で毎日毎朝凍る時であつたら作者にその大霜を把握する心も起
らなかつたであらうしまた、以前にはあつたに大霜のなかつた秋季なりしことがほ

ば不言の中に推知されるのである。

○戸を開けて入り来る憲兵のうしろより流れ込みたり今日ひどき霧

この作も事件に取材したもので家宅搜索といふ詞書があつた後からここに入つて来た私は當時のことをきくと終日に及んで全家宅が搜索されたのだといふが、それいふ騒ぎの中にあつて而も作者は自然景象に眼を向ける餘裕を失はなかつた。それ一事でも感すべきであらう。前掲同様この歌も人事と自然とが取り入れられてそれそれがちくはぐになつてゐないのを多とすべきだらう。詩人として有名な加川文一氏の作歌である。

○小説を讀みてをりしがその中のある表情にしばし拘る

(矢尾 嘉夫氏)

大同小異の取裁の中にあつていささか異色のあるものと思ふ。この作者にしてオースの種のものは今までめつたに作つたことはあるまい。類型類想を脱することは今のキャンピング生活では至難のことであり、それだけにこの作の如きは注目してよいと思ふ。四五句の中に作者が小説に暫うくとはれてゐたことが現はれてゐるが「ある表情」とだけいつてそれ以上をいはないところに却つて餘情もあらう。かういふ種のものはその扱ひ方によつては甘く卑くなり勝ちなのであるがこれは危く救はれてゐる。

○椅子一つ卓一つなきこの室に寂しさはいはず荷を解かむとす

不忠誠隔離によつて更に遠く作者が移動して来た時の歌である。着いてから漸く

部屋をあてがはれたが、椅子も卓も何一つない室であつたけれども寂しさはいはず持ち来た自分の荷を解かうとするものである。歌の寂し(淋しと異る)には甚俗でないものとはずつと深い意義を持つものであり、この作のも勿論さうである。中には隔離と聞いて意志を變更した人も相當にあつたやうに傳へられるが遠く移動して来た人はそれぐに信ずるものを持つてゐた筈であり、この四句の中にはさういふ作者の信念といはうか確い志が不言の中にあらはされてゐるのであり、そこがこの歌の價值ある所以である。作者は桐田しづ氏であるが婦人は男子以上に部屋の調度には深い關心を持つものであり、これから居着くべき室を先づ眺め入つたであらうし、一二句の発想から一首全体をみならしい中に強さのあるものである。

● しつとりと寒き夜霧の降ればにか今宵をいたく雁啼き立つる

仁熊登美子氏の作であるが状態と氣分が一致せる女らしい歌と思ふ。ところでこの三句は寒霧の降るためなのだらうかと感じたのなう一應このまゝでよい筈ではあるが幼いといへぬこともあるまい。降りしきりとか何とかその状態のみを一層こまかに描き出し、あとは讀者の想像に仕かしたう一首の餘情を深くするわけである。

(一・二六・四四)

俳句

こほろぎ

隠し子連れ来し鷄や秋晴るゝ

秋の水流れて青き藻は底に

イヅアキユイに柏妻敏系き夜々となる

月に口開けて嗽をしてをりぬ

片脚を犠牲にこほろぎ遁げ行きぬ

折にふれて

テキサスの月にサーカスかゝる街

霜の夜の病院の神慈と酷と

あの鴉乙女の秋の歌や詩に

夕時雨時雨と左手にかいてみる

矢野紫音女様へ

雪嶺を窓一ばいにお茶の色

中口 飛朗子

保田山 晴風



書き下し

長篇小説

時代

序章

樋井 良二

二日二晩の業務を終へて、汽車は目的地の收容所に到着した。十月の山脈は、薄く雪氣を帯び、盆地の空氣はひんやりと冷い。太陽はもうだいぶん高く昇つてゐた。四百餘名の乗客者は、窓から首を突き出し、珍しげに周圍を覗き見る。彼等には珍しくないキャンピングの薄黒いバラックの連接ではあるが、何處まで續くとも知れない棟棟の端に、ピラミット形テントの兵舎が、整然と張り設けられ、鉄柵で圍まれた入口に、戦車、ジープが嚴めしく並置されてあるのを、彼等は恐ろしいものでも見みやうに眺めるのだつた。一種異常な感情をたつた。好奇心、疲勞、希望、及逆、新しい生活に入る複雑な感情が彼等の心を流れて行く。車中での最後の人員點呼が終り、愈々キャンピング入りだ。銃剣を肩に、憲兵が四方八方に見張りしてゐる。手荷物を手には、下車し、各々定められたツラックに分乗する。河村は、彼と同貨車に乗つて

来た五六十名の人たちと一つの家屋に入れられた。学校が、何かの爲に新築されたのであらう。まだ不完成な、がら空きの部屋は相當寒く、薄着の彼はがた／＼ふるへてゐた。みなる寒さうだ。百十何度の砂漠の真中にあるキャンブから転任して来た彼等には急転直下の氣候の変化である。手荷物の檢閲が始る。二人の憲兵の前に、彼等の手荷物は擴げられる。雜誌、化粧品、着物、その他日常品の入った大小の手荷物がいく／＼目を通される。レデオ、タイプライター、裁縫ミシンは特別嚴重に調べられる。ボール紙や木製のスツケース、風呂敷、種々様々な手荷物が、あちらへ行ったり、こちらへ飛んだりする。部屋の小隅で、そつと重要書類を取り出し、懷に隠してゐる老人もある。待ちくたびれて居睡りしてゐる男もある。幾度か檢閲の經驗を得て来た彼等には、禁制品等を入れるやうなヘマはしなかつた。覗いたり、かつくり返したり、嚴重に調べられてゐるものも居たが、別に故障もなく、どんなんパスして行く。窓の外には、彼等より先に転任して来てゐる人々が、群がって彼等を覗き見してゐる。巡視してゐる憲兵の目を盗んでは、立入禁止の鉄網をくぐつて、^の〇さん、^の〇さん、と呼掛けるものもある。二重張りしてあるガラス戸を開けて、彼等は話し合ふ。さつと冷たい風が入りこむ。

「私、〇ブランクにゐるのよ、あなたもそこへ住めるやうに願ひ出なさい。」
こんな声も聞こえる。河村は、親友武藤は来て居ないかと、あちこち目を配つたが、彼らしいものは見當らなかつた。立退前に別れたきり、逢はない武藤に二年振

で會へるのが楽しかった。武藤は彼のためにルームを用意してゐてくれるやうになつてゐた。

「姉さん。まあ、三郎！」

彼は後を振り返つてみた。同じ部落に住んで居た友人久米の妻朱美は、弟の肩に顔を押しあてて泣いてゐた。姉弟二年振りの會合だった。

「これ、私の弟、こちらは河村さん。同じブルクにゐた人なの。」

泣き腫らし、睡不足な蒼白い顔をして、朱美は拳で涙を拂ひながら紹介した。弟は血色の好い、元氣な二世青年だった。朱美に似て、端整な容貌をしてゐた。

「僕、ルームを取つておいてあげたから、ハウズイング デパートメントへ行つたら、これを渡しなさい。」

と姉に紙片れを渡して、

「ぢや、あとでまた。」

といそがしげに出て行つた。胸に働き人のバッヂを付けてゐた。検閲が済んで、登録が始る。一人一人机の前に呼び出される。一人去り、二人去り、河村は一番最後に残された。

彼の前の番号の男が登録してゐる。騒々しかったホールも今はガラ空きになり、ひっそりとしてゐる。寒さが一層身に沁む。たまりない空腹を感じる。正午はとつくに過ぎてゐる。今にも雪でも降りさうに外は曇つてゐる。低い机に、大きな身体

をばみ出しさうにして腰掛けてゐる憲兵の前に、かがむやうにして、丸くなつて立つ男の、まづい英語の會話がぼそ／＼と聞こえてくる。

「君の名前は。」

「山田ヘンリーです。」

低い聲で、男は吃り／＼答へた。

「年齢は。」

男は黙つてゐた。

「年齢は。」

憲兵は低い聲で問ひたゞす、暫く考へてゐる男は、

「四十ニ、です。」

にぶい聲だつた。

「國籍は。」

「アメリカ。」

「前住地は。」

「アリゾナの転住所。」

「その前の住所は。」

「シカゴ。」

「ワイフは居るか。」

「お前は結婚してゐるか。」

「――」

男は沈黙を守つてゐる。河村は何時の間にか、男の傍に立つて、覗き見るやうにして、彼等の話を聞いてゐた。黒い古びたスエター一枚の男は、見窄しく、寒さうだつた。憲兵はペンを置いて男を見上げた。男は死人のやうに堅く口を噤んでゐる。二日の旅で髭は延び、顔は青黒く歪んで見えた。この男は汽車の中で、河村の隣に席を取つてゐた男だつた。男は席に居た事はなく、列車でのケチンヘルバーとして、始終食堂車の方で働いてゐたやうだつた。夜は十二時に歸つて来て、仕事着のまま、窓際には体を海老のやうに曲げて、瞬くまに斬をたてはじめたのだつた。朝は暗いうちに起きて仕事に出掛けて行くのだつた。河村と同じキャンブに居住してゐた男ではあつたが、彼は男を見るのは、列車の中が初めてだつた。

「イエス。」

暫くの重苦しい沈黙が続いて、男は深く首を垂れた。

「妻の名前は。」

「山田メリー。」

「年齢は。」

男は懷中から財布を取り出し、内から古びた紙片を出して、あちこちとひつくり

返して何か搜してゐた。

「二十六夜。」

指を数へながら男は答へた。

「妻は現在何處に居るか。」

男は再び沈黙した。憲兵はげんさうに男をじろく見た。

河村も、男が何故あんなに沈考するのかわからなかつた。英語が解らないのだろうか。そんなにも見えなかつた。睡いのだらうか。それにしても彼の眼はあまりにも鋭すぎた。

「現在何處に居るか私は知りません。」

とつひに答へたつた。

「お前たちは別れたのか。」

「イエス。」

「どの辺にゐるか、見當がつかない事はないだらう。」

「いや、私は知らないんだ。多分加州へでも歸つたんだらう。」

憲兵は困つたやうに一考へてゐたが、何か書き込んだ。

「お前たち夫婦の間に子供はゐるか。」

「イエス。」

「何人居るか。」

「二人です。」

「それ等はどこに居るのか。」

「ワイフと一緒にゐる。」

「子供の名前と年齢は。」

「姉の方はグレースでセズ、妹はメリー。五才です。」

一瞬、微笑を頬に見せて、男はつぶやくやうに答へた。

「妹の方は妻と同じ名前だね。」

男は肯いた。

「お前の父親は何處に居るか。」

「父親はありません。」

「母親は。」

「ゐません。」

「兄弟は。」

「一人もありません。」

男の聲は、太い怒鳴る様な聲に変わつてゐた。

「此處へ署名しなさい。」

憲兵は、ペンを差出した。男はひつたくるやうにしてそれを取り、**乱暴な手**つきで署名した。状態の中へ、それらの記事の記された紙を入れて、**憲兵は、**

「これを持って第二号のルームへ行き給へ。」

と云つて状袋を男に渡した。二つの木製のスリッケースをさげて、男はゆつくりルームを出て行つた。帽子をかむらない、白髪が多い男の後姿を河村はぼんやり見送つた。寫眞と、指紋を取る第二号のルームへ男は消えて行つた。

「お前の姓名は。」

「カズミ カハムラ。」

「生年月日。」

「一九二一年六月三十日。」

「出生地。」

「加州、スタクトン。」

憲兵と河村の問答である。部屋には二人の他に誰もゐない。河村のスリッケースが一つ部屋の片隅にしょんぼり置かれてゐる。廊下では騒々しい人聲がする。子供の泣き叫ぶ声、荒々しく走り廻る靴音。憲兵は別にうるささうでもなく、落着いた聲で記録をつづける。質問は、さっきの男のと変りはなかつた。

「父親の姓名は。」

「死んで居りません。」

「母親は。」

「アリゾナのセンターにゐます。」

「兄弟は。」

「二人とも日本にゐます。」

サインを済まして、渡された状袋と、スリッケースを提げて彼は第二号のルームへ入つて行つた。

呼ばれるまゝに彼は寫眞機の前に立つた。眩しい電氣の光線が、ばつと彼の顔を照し出す。寢不足の鬚で青黒い、頬の鋭つた彼の顔が、空間に醜く映り出された。不快な氣持だつた。正面と横顔の寫眞が取られた。二九五二Aの番号が貼り着けられた。其處が済んで、次の憲兵の前に立つた。身長、体重、容貌の特徴、それにさつき調べた戸籍の入つた状袋を受取つて、幾枚かの紙にタイプし始める。室内はがや／＼と騒しい。女の聲、男の聲、若いもの、年寄りも、不味い英語や、流暢な英語、彼は、懶い頭を抱へてそれらの人たちをながめてゐた。彼の隣の机では、一人の老婆が、指紋を取られてゐた。まだ入隊して間もないであらう。若い憲兵が馴れない手つきで老婆の兩手の指に墨を塗つてゐる。恐ろしいものでも見るやうに、老婆は、がつと恐い目つきで、皺れた自分の指と、大きい、きれいな白人の手とを見詰めてゐる。

「すぐすみませう。」

と憲兵はにこ／＼して、老婆に氣毒げに話しかけた。解つたのか、解らないのか、老婆は、黙つてゐた。微笑は見えなかつた。二枚のペーパーの上に、右が済んで、

左の指と老婆の指紋は一本一本押されて行く。思ひなしか、老婆の手は少し、震へてゐるやうだつた。寫眞を撮られたり、指紋を押したり、まるで監獄へでも入るやうだ、と老婆は、情ががつてゐるに違ひない。無理もない事だ、と河村は思つた。老婆をそつと盗み見た。色の黒い、くしや／＼と皺の多い七十位の、田舎者のお婆さんらしい白髪ばかりの頑丈そうな顔だつた。落ち窪んだ眼は薄く閉ぢられてゐた。指紋登録が済んで、なにか、ぶつ／＼口ずさみながら、黒く染つた十本の指を、油で拭いて落してゐる。脊の曲つた、老婆の恰好をながめる彼の頭は重かつた。空腹と疲勞とで、彼はいら／＼して来た。早く此の部屋を出たかつた。生欠伸が何度もある。誰を見ても、元氣のない顔をしてゐる。タイプがやつと済んで、彼は指紋のところへ行かうとした。

「和美ー・和美。」

びつくりして聲の方を振り返ると、窓の外で武藤が立つてゐた。

「おい、武藤。」

河村は懷しさうに、窓ぎはに寄つて行つた。武藤は二年前とはちつとも変つてゐなかつた。相愛らずにこ／＼した人一倍脊の高い、瘦せた武藤だつた。窓がラスをこぎ開けるやうにして、

「随分瘦したが、みっからなかつたけど、こんなところにゐたのか。どうか、元氣か。」

と話しかけた。齒切れのいい、武藤の聲は懐しかった。

「あ、あんまり、待たされるもんだから、実際くさってるよ。」

河村は室内から答へた。

「おい、ママはどうした。」

「色々理由があるんだ。まあ、あとでゆつくり。」

「ルームが取つてあるから、ハウズイングへ行つたら、俺たちのアドレスを傳へて、俺の名前を言へよ。直ぐくれるから。」

武藤は去つて行つた。

指紋の登録を終へて、河村は部屋を出た。長い列の一番後で各々の部屋を受取る爲の最後の登録だった。

「おい、俺等五人で一つのルームを貰ふやうにしやうぢやないか。」

「くれるか、どうか解らないぜ。」

「独身者はレクホールへ押しこめられるらしいぜ。」

「そんなことはないだろう。兎に角押し強く交渉してみやうぢやないか。」

前の方で、五六人の青年が話し合つてゐた。

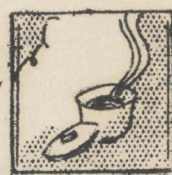
「あなたがたと一緒にブラックへ這入れるといいわね。」

「真中のルームだといいわね。」

こんな女の聲も聞こえてくる。河村は、そうしたルームに対する不安のなさが

何よりだった。知らない十人ばかりの独身者たちとレクホールに住まなければならぬことは決して心よいことではなかった。不自由とはいへ、一年餘も生活して来た、住み馴れたキャンプから、かうして新しい転任所へ、新しいブラクへ、知らない人たちの中へ入って行かなければならないことは悲しいことだった。せめて、一人でも多く、同じキャンプから来た人たちと生活したいのが彼等の小さな望だった。曇つてゐた空は、いつのまにか、ところ／＼雲のとぎれを見せて、太陽がまはやく、彼等の頭上を照らし出した。

別に故障もなく、手續きを終へて、與へられたブランケット四枚を抱えて河村は事務所を出た。スーツケースとブランケットで、ぎつしり詰つてゐるツラクの後へ、彼は蹲るやうにして腰を掛けた。ほつとした氣持だった。ブラクの中を右、左に廻つて走つて行くツラクから、殺風景な樹一本ないキャンプの景色を眺める彼の、頭腦は重く、ぼんやりしてゐる、不愉快氣ではあつたが、母と別れ、いま久米とも別別になつて生活するのだと思ふと、一寸淋しい氣持に襲はれるのだった。これから、以前の学校友達との新しい生活が始まるのだ、氣の合つた者同志の楽しい暮らしをするのだと思ふと、新しい明日への希望で、うき／＼と微笑ましい氣持にもなるのであつた。



蕎麥

水戸川 光雄

ドアを開けると一夜目にも美しい銀世界であつた。スリッパ一つで飛出さうとした迂闊さがお可笑かつたのか思はずニッリ笑つてしまつた。夕方から降り出した雪があるから、もう白くなつてゐるのは解り切つてゐるのだが、つゝ雪のことは念頭を離れてゐた。さうだ雪が降つてゐただうと忘れてゐたものを急に目の前に並べ出された時のやうな甘い驚きであつた。汗ばむ程の暖い室内とドア一枚外は冷い雪である対照がはつきりとしてゐるドキンと胸に來た。そしてそれは擦つたい樂しさでもあつた。急いで下駄に履直してバスロップのまゝ家を出た。やつとニを被つた許りの柔い雪を、いためる様はそつと踏んでくおばさんの家まで來た。蕎麥を上げませうーと言はれて、「ハイ」と正直に飛出して來たのであるが、戸口まで来て、考へもしなかつた羞恥心が、喉まで出掛けた聲を止めて終つた。手にしたお盆と白ちやけた鍋、それにバスロップの姿には、自分乍うさもしいものを感じた。「どうしよう」と考へる後から湧いて來るふてぶてしさか思ひ切つてドアをノックさせた。「おや／＼大変な雪やな！ さ、さ、お入り」感心した様におばさんは地面をぐるりと見廻した。遠慮なくやつて來ました。「そや／＼蕎麥やつたぞ、出來てまつせーそれお盆やないか？」「ハ！ 別に何にもないんです。構ひませんか？ これに入れて下さい」

「全くや独り身やさかい無理ありやへん！」尻上りの関西辯は聞き馴れてゐるせゐか氣持のよい感じである。お湯がしゅんく鳴つてゐる。開放しの台所は足の踏場まじい混雑であつた。それ等の物が皆、有り合せ、間に合せの手製品ばかりで、乏しい乍らお正月を祝はうとする主婦の努力が滲み出てる。木の杓も新しい押ずしの揃ひや、歪んだ俎、出来立てのすしが鍋蓋に盛り入れゐるのを、見るとは無性に一つ目を通してゐると切ないものを感じた。「あんたとこ四人やつたナ」振返つたおばさんは大きな盆を持て余してゐた。「済ませんネ少しでいいんです」。「仰山なによつてがまんしナ縁起まんやさかい」。「遊んで行きな」。「エ、有難う！僕んとこ留守ですから」。「そうやろ、うちも皆出て終つたがナ軍部の許可があつたちふて、大きな氣になつてゐるワ」笑ひ乍ら手早くすしを四ナプキンに巻いてお盆の側へ乗せてくれた。「明日はえ、正月やで！精神のまんや、餅なんか慾しやありやへん」笑つてゐた顔をギユウと引締めておばさんはさう言つた。外は相変らず大粒の牡丹雪が舞つてゐた。大家内を持つたおばさんが独身者に寄せる親切と、明日はお正月と云ふ、子供みたいな樂しさが混り合つて胸の奥がユラ／＼ゆれた。今歩いて来た道に黒い「三」の字を残して来た苦なのにもう綺麗に塗潰されてゐる。「餅なんか慾しやありやへん！」と云つたおばさんの言葉がど／＼胸にはいつて温か／＼した。惨酷に思へる程の正月を迎へようとしてゐるが、さうではないのだ。むしろ當然過ぎる位の當然な事実ではないだらうか。最悪を覺悟して来た自分達はどの様な物

が押寄せて来やうとも、冷然と嘲笑してやるだけの余祐を持つてゐるのだ。身を以て惨酷と云はれるものにぶつかつて行き一つ一つを征服して行く事に小氣味良い心のはずみを感じた。——一番おそく歸つて来たY君と人数が揃つたので車座になつた。蕎麥が喰へるとは実に光榮の至りだヨ、Y君がもう一度お盆を目の高さに上げて三拜九拜した。「Kのおばさんは前から御親切な御老人だとは思つてゐました」とS君の感想である。四人の同僚が晦日にチキンでも食へ様と毎朝フィニッシュに交替で出掛けたが大抵の頃でシビレを切らして手ブラで歸つて来た。もう何にも無い物ついでに諦め様と思つてゐた時、晦日蕎麥にありついたのである。お汁が煮えたのでY君は四ツのカップに手際よく盛つてくれた。「カップでは氣分が出ないね、賢澤云ふなよ、嫌だつたら俺が喰つてやりませうバイ」熊本ではこれをんぞばと申しましたヨ。本當に子供みたいな噪ぎ方である。あまり好かない僕も人並に箸を付けて見た。蕎麥特有の苦味が舌に来て、ふと母が特別に僕にと云つて、しつぱくそばを誂えてくれたのを想ひ出した。——さうだ父も母も悉く晦日蕎麥を食へたであらうか、そして、弟は——生きてゐる母と一緒に——或ひはもう二度と蕎麥の喰へない遠い／＼所に行つてしまつたのではないかと思つた。

(二二、三三、四三)

智識人の責任

丸山 定夫

煙草で黒くなった齒を出して笑みながら話してゐた教育會の男が、急に眞顔になつて、「子供達の爲だと思つてどうしてもやつて下さい」と云ひ残したまゝ振り向きもしないで歸つて行つた後、町田さんはストローグに石炭の塊を投げ込むと、その前のビーチチェアに腰を下した。

元のキヤンプでブラックの支配人に牽り上げられ、運惡くそのブラックでツラブルが絶えなかつた爲に、町田さんは敵をつくり、味方をつくつたが、さう云ふことはよいとして、後でよく考へて見ると、そのキヤムプで町田さんを煩はした事柄は、どれもこれも子供の謔の仲裁に入つて馬鹿を見たやうなもので、胸糞の惡くなる程馬鹿々々しいものに原因したもののばかりであつた。

食事の時間を十五分遅くするといったやうな、どちらにしてもたいして變りないことが飛んでもなくやかましくなるキヤンプであつた。働く人のために十五分晝食を後うす告示を持つてタイムキーバのオフィスから、食堂係の日本人が廻つて來た時の態度が生意氣だつたと言つてチーフが怒り出し、「そんな規則には従はん」と拒絶した。その食堂係は町田さんのブレークに任んでゐる半二杵半歸米の三十五六の男であつた。時間變更に反対したのは、同じブレークの食堂のチーフであつた。二三

週間以前にも、食堂係の男がこの食堂の料理は拙いと言ったとか云はぬとかで、一様めしたことがあつた。

時間変更の問題が発火點になつて、今まで焼つてゐた不燃焼の煙に一時に火がついたやうにブラック全体が燃え出した。だが、問題のありかが照し出されて見ると、實際はチーフ派と食堂係派の諍であることがはつきりして來た。

「あんな解らず屋は追ひ出してしまへ。」食堂係派の人々は言觸した。

「あいつは犬うしい。」チーフ側も負けずはゐなかつた。

町田さんの處に、あのチーフは食堂の砂糖をちよろまかしてワインを醸してゐると言つて來た外部でレストラン働をしてゐた独り者に、確かな證據があるかと訊いたら、さういふ噂があると答へた。彼は更に問ひつめられると、「どうもさううしい」と曖昧にしましまつた。

食堂係の事を「あいつは犬うしい」と告げに來た男は、事實の有無をつきつめようとする町田さんの問に対して、そのブラックで皆に相手にされない辰さんと呼ばれる法螺吹きで嘘つきのグラウンドクルーの一人から聞いたと言、抜けた。

時間変更の問題は、さう言ふ風に事實のはつきりしない噂まで混入して、だんく騒がしくなつて行つた。ブラックの彌次馬連がそんな具合に二派に分れて晩合を始めると、ブラックの雰囲気が一愉快になり、町田さんが仲裁に入らないわけには行かなかつた。仲裁に入つても憎まれ、入らねば入らぬで「あんな奴にはマネジヤーの

資格がない」と言はれるに決つてゐた。何れにしろ、ブラックを平穩にすることは町田さんの責任の一つであつた。

町田さんとブラックの有志によつて與へられた解決案は、チーフに他のメスホールに移つて貰ひ、食堂係を他のブラックに移すことであつたが、どちらもそれに應じなかつたので、つまるところ町田さんが兩方から白い目で見られるだけになつて雙方からズ／＼言ひながらも次第に問題はをさまつて行つた。そして晝食の時間はオフィスからの催促に従つて何時の間にか規則通りになつてゐた。

町田さん自身はその連中に好感を抱かれなくてもよかつたが、曲りなりにも片附くまで、狭いアパートが毎日晝夜の區別なしに、碌でもないことを言ひに来る人々の訪問を受けることは、妻と子供の事を考へると氣の毒でならなかつた。町田さん自身も、話の題が何であれ——戦争の話だらうが、ゴシップだらうが、隔離の事だらうが——聞きの復聞きを話し出されると、嗚鳴りたくなる程不愉快だつた。そんな話を聞いたからといつて、蒸々苦しいキヤンプの生活の一つもよくしなかつたし、それどころか、そんな事から却つて揉め事が起り、人を傷けることばかり多かつたからでもある。讀書でもしようと思つてゐる晩にさう云ふ連中で坐りこまれると、町田さんは、こんな人間の爲に大切な時間を空費しなけれはならぬとは情けないことだ、と感じざるを得なかつた。

併し、それは町田さんが人を馬鹿にしてゐるといふことではなかつた。用件がは

つきりしてゐる場合には、何處までも満足のいくやうに面倒を見てやった。例へば、多数の人々の間には、はつきりと無効だといふことが分つてゐる失業保険のことを、どうでもよいから兎も角問ひ合せて呉れといつて来る者がゐた。町田さんはそんな場合、上手ではないが、英文の手紙を書いて問ひ合せ、そんな人を満足させてやった。白人の家に荷物を預けてゐるのを取り寄せたいかう手紙を一本書いて下さい、といふやうなことも喜んでしてやった。そんな事を引き受けるのは出来る者の社會的責任だと町田さんは思つてゐた。だが、人騒がせをするだけの話を持ち込んだり、住民の爲に有害な実のない噂を撒き散らして歩く者に耳を貸すことは拒絶する権利がある筈だと思つた。しかし、町田さんにはそんな人々をつつけどんに追ひかへす勇氣はなかつたので、時々皮肉な質問を發する位で、いつも黙つて聞いてゐた。

町田さんの事はだん／＼傳つて、他のブルクの知りもしない人々が、種々様々な問題を持ち込む数が多くなつて、後には町田さんの家では一日に五回もお茶を出すやうな事もあつた。而も、さうした人々が「頼み事」で来るのには日曜も祭日も、夜も晝もなかつた。向ふの都合のよい時に遠慮なくやつて来た。

全く、キャンブでは一度大衆に「見込まれる」と、善くても悪くても、それが運の盡きたと言つてよかつた。自分の生活に還りたいと思つても、周圍がさうして呉れなかつた。よければよいぞみんなわんさ／＼で押しかけて来る主人公を神経

衰弱にしてしまひ、反対に期待に背いたり、過つて踏み外してしまふものなり、今度は骨までしやぶり盡してしまはねば氣がすまぬのが、總てに極端なキャンブの行き方だつた。今日英雄に押し立てられゐても、有用性が無くなると明日は何處に蹴落されるかわからなかつた。

町田さんは隣のビルディングに住んでゐた中年の子無しの夫婦が羨ましくなつた。教養のありそうな静かな夫婦の行き方が結局賢いのではないか、と思ふやうになつた。家のワイフにヒステリーの氣があるかうといふ理由で、公の事には絶体に顔出しをしないで、夫婦でメスホールで働き、暇の時には、二人が、リでアパートの前のさゝやかなローンやフラワベッドに手入れをしてゐた。それが済むと、緑と朱の編のあるビーターニアに夫々腰を下して山を眺めてゐた。二人並んで何時までも山を眺めてゐることがあつた。

日本で高等教育まで受けて来たその主人が、ブラックの事は何を頼みに行つても旨く逃げてしまふのを、町田さんは怪しからんと思つた。社會に対する責任回避だと密かに憤慨もした。けれども、さう云ふ人達が近所に人氣のあることも事實だつた。町田さん自身も、自ら好んで人の上に立つことは嫌ひだつたし、出来るだけ「独り」で置いて貰ひたかつたのだが、最初のマネジャーが失敗し、次に選ばれた人が出所した後、無理矢理に引張り出されたのであつた。其の時町田さんを受諾せしめたものは、それがブラックに対する義務だ、他にやる者が居なければ仕方がない、と

いふ觀念だけであつた。ところが、その仕事を引受けて見ると、全く胸糞の悪くなるやうな事ばかりで、實際さう云ふ義務があるのだらうか、と疑ひたくなる程だつた。それよりも、戦後の社會に貢獻する準備として自己を磨く事が却つて建設的な、眞の社會奉仕の道ではないかと考へるやうになつた。

隔離の發表があつたのはさう云ふ時であつた。だから町田さんがこちらに送られて来たことは、町田さんにとつては、價値の疑はしい多忙さに別を告げて、新しいキャンブ生活をするのであつた。日本へ歸つて後、本當に役立つやうに勉強しようと思つて、隠れた住民になるつもりである。

しかし、キャンブの實際は、町田さんが期待してゐた通りには行かなかつた。漸く落着いたと思つた町田さんに又白羽の矢が立つたのだつた。町田さんが南加の田舎で学園長をしてゐた頃の知人で、この教育會に關係してゐる人が、三回も頼みに来て、今、乘氣のない町田さんに最後通牒の言葉を殘して立去つたのだつた。

X X X X X X X

町田さんの投入れた石炭の塊に火が燃え移つて、ストーヴが勢よく熱くなつた。ピーチ左アに腰を下して脚を組んだ町田さんは煙草を吹かしながら考へた。今日も便所の周りに集つて遊んでゐた子供達の事を考へた。石炭の推積を中心に駈け廻つてゐた子供達の事を思つた。その子供達の間に町田さんの男の子の仲間入りしてゐた。やがてあの子供達を連れて我々が日本の土を踏む時が来るだらう。その時、我

々の子供等が、新しい環境に驚き迷はないやうに、立派に役に立つやうに今から準備をして置かねばならないのだが、さうした教育の責任は誰にあるのだうか。もう長い間この子供たちは教育らしい教育を受けてゐない。ぐず／＼して居る中に、彼等は身体だけが伸びて、吸収性の強い頭腦も可塑性ある品性も内容の空虚なまゝで固まつて行くのだ……一体誰の責任だ……子供達自身の責任ではな

い……
町田さんは急に、さつき教育會から来た人の言つた「智識人の責任」といふ言葉が新しい意味を持つて浮きよつて来るやうな氣がした。

町田さんはその翌日自分からその教育會の男を訪ねて見ようと思つた。(終)



下駄

咲 春枝

日毎に寒さがゆるみ、地を這つて初春の空氣がツレ湖に訪れて来た。春が来たのだ。と思ふと何だか嬉しさと涙ぐましいものを感じた。久しぶりに、落着いた氣持で洗濯する。洗つたばかりのカーテンは白い魚旗の遊泳の如く揺れ、其の隙間から二月の晴れた空の青さが瞳に沁みる程ひろい。二月近くも空家になつてゐた隣家がふさがつたので、私は興味に似た樂しさで落着かない。ひと片付けしたのか子供の笑聲、レデオが鳴り始めた。

どんな人達か、何處から来た人なのか知ろ、さう言つた女の好奇心が、何か焦立しいものを感じ洗濯物を乾す。長い間陰氣な空氣に囚されてゐた隣家が、急に顔を洗つて化粧した様になるかゝるくなつた。

朝夕顔を合はすけど、私とは何の交渉もない人で、言葉一つかはした事もないが、何か懐かしいものを感じ
る。家も何もかも捨て、同じ運命の下に泣けるすべての同胞と共に相抱かうとしてゐる。同胞は運命を
呪はない。たゞ、運命の下にある悲しき道伴れをいたはり静かに旅をしてゐる。

私達は、友を持つことによつて、闇の中に、幾つかの星がまたつき始めるのである。貧しき人もなく同
じ感しの中に生きてゐるのである。虚栄も虚飾もない、風の吹くが如く自然に生きてゐる。

子供達は、春の光の中で、土にまみれ微笑に吹かれて遊んでゐる。ヒラから来た女の如く、可愛くコッブリをはいて
鳴らしてゐる。コロラドから来た兒は親の下駄をひっかけ、他愛のない言葉で遊んでゐる。私は何か如く懐しい心にとらはれた
何の爲に、キャンブ生活をするのか、明日の生活は、未来は、どう言つた複雑な事は、思ひもこい、あたかい、親の
膝でよく悪戯をする、しかし、其の悪戯は、笑ひと涙を潜めてゐる神のごとき無心と無感とを含んでゐる。

ヒラから来た兒が童謡を唄つてコッブリを鳴らしてゐる。私は涙ぐんで見てゐる。昔の前を解放された青
年達が下駄をはいて、口笛を吹き行進してゐる。憂鬱と溜息に因へられくる若年達は、過ぎし日を志
れ微笑してゐる。カラコロと響いて行く下駄の音は、憂鬱な魂のすすり泣きの様で悲劇の現を、劇へ私の心を
誘つた。

下駄で育つた私は、下駄の愛撫を想ひつゝ、過ぎし懐しい少女時代を追憶するのである。六つの春祖母にあつ
けられた時、初めて下駄を買つた貴族の珍らしくて夜寝る時、はいて寝たのはよいが、夜中に炬燵に落し
た。翌朝祖母にひどく叱責を受けた。子供心の心には乱れに乱れ泣いて、唯一人ぼんやりと半日鎮守の森で遊
んだ。そして泣きつかれた。私は夕暮に、祖母の背に子守唄を聞き長い石段をおりた。

祖母の日和下駄が夕闇の森にこたまして、何が知れず子供心に淋しい氣がした。今もなほ私の脳裡にこびり付い
てゐる。私はこれまで、何百と言ふ変つた下駄を見たが、シロムとヒラの二下駄が一番好きである。カラコロカラと
鳴るあの下駄の旋律は、一つの調子を包み、ことなつた生活の包みかしてゐる。今では誰でも彼でゐる、下駄を
はかない者がいない。自然の生活に帰つたのだ。食事をきく、キャンテン病院にも下駄が遠ざかしてゐる。

私は、ふと、下駄をはいて、キャンブを一通り見て見たいと好きな好奇心をおこして、下駄をはいて外に出て
見た。素足の指にふれた地は真冬の寂しい眠を想はせる程冷たくこたへた。

編輯後記

△とかく頽廢的になりがち
なキヤンプ生活を有意義

なものたらしめんとして、また若輩の身をも顧ず在米移民文学の最後を飾ると云ふ様を大それた野心をもつて文藝同人雜誌を發行してみたのでありますが、いざ實際に其の仕事に取り掛かると意外に煩雜な仕事であるのに驚き、創刊劈頭から悲鳴をあげてしまつた様な仕末でした。なに分編輯が素人、印刷が素人、製本が素人、ずぶの素人ばかりが寄つて發行した雜誌でありますから皆様が満足するやうなものが出来なかつたと恐縮して居りますが、内容は山積した原稿の中から良心的な作品ばかりを撰んで載せたつもりです。その呉御賢察を乞ふ次第です。

△戦後への準備として懸命に日本語を學んで居る二世達の日本語熟に多少なりとも拍車をかけ、貢獻

するところあるならばと思ひ、二世の作文を集めて綴方教室なる欄を設けてみました。事情が許す限り此の欄は永續させてゆきたいと思つて居ります。

△本誌は四ヶ月の悪戦苦闘を経て此の世に生れて未ました。折角生れて来た同人雜誌でありますから、或る程度のレベルを保つた眞の文藝雜誌として成長させて頂きたいと希望して居ります。従つて投稿諸氏も大いに頑張つて傑作を送附されん事を望みます。次号は四月下旬頃發行する予定です。

△未筆ながら鈇筆に献身的努力をして下さつた大城嬢に心から感謝の意を表しておきます。



昭和十九年 月 日 印刷
昭和十九年 月 日 發行

發行者 鈺柵同人

編輯責任者 山城正雄
野澤襄二
河合一夫

鈺 肇 大城眞砂子



發行所 鶴嶺湖一〇〇B

鶴嶺同人雜誌